

顕彰状

カイ・ララ・シャナナ・グスマン氏は、1946年東ティモール民主共和国のマナトゥトゥウに生まれ、独立第一世代の多くが通ったダレのセミナリオ（イエズス会の高等学校）に進んだが、経済的理由で退学を余儀なくされ、様々な職業を経ながらディリの夜間学校にて学んだ。その後、東ティモールの独立を目指す運動に参加し、1974年からは宗主国ポルトガルでの無血革命を契機に即独立を目指した東ティモール独立革命戦線（フレティリン）の情報部門でジャーナリストとして活躍した。

東ティモールがインドネシアに併合された24年間、他の指導者の多くが海外に亡命していく中で氏は東ティモールに残り、独立運動の指導者としてたゆまぬ闘いを続け、東ティモール人の深い信頼と尊敬を獲得した。その後、民族抵抗革命評議会議長やマウベレ民族抵抗評議会議長の要職を歴任するも、1992年にはインドネシア軍に逮捕された。しかし、独立運動の指導者として国際的に知られた氏の収監はむしろ「東ティモールのネルソン・マンデラ」としての名声を高めることとなった。1996年、氏とともに独立運動のリーダーの一人と称されるラモス・ホルタ氏（後の同国第2代大統領）と、同運動に貢献したシメネス・ベロ司教の両名がノーベル平和賞を受賞しているが、収監中であつたために受賞しなかつた氏こそが同賞にふさわしいとの意見も強く、事実1998年にポルトガルで開催された東ティモール民族抵抗評議会では、政治犯として刑務所に収監されていた氏が独立運動の最高指導者として選出されている。

国際社会からの氏への強い支援とインドネシア政府への圧力もあり、刑務所から自宅軟禁に移されると、国際的な著名人が相次いで氏と会見するなど、その存在感は一層高まり、1999年の住民投票によるインドネシアの自治案否決と独立選択の決定を受けて、氏は解放されると同時に最高指導者に就任した。

東ティモールは2002年5月20日に独立を果たし、氏は独立直前の4月14日に「独立の父」として圧倒的な国民の支持を得て初代大統領に選出された。大統領時代には、1974年以來の人権侵害を明らかにするために東ティモール受容真実和解委員会を設立し、国民間の和解に大きく貢献したことは特筆に値する。2007年4月には自らの政党、東ティモール再建国民会議を結成し、第4次、第5次立憲政府の首相として国民の融和と国家建設を牽引した。2015年には、世代交代を掲げて、首相職を辞任する一方で、計画・戦略投資大臣として新内閣に留まり、引き続き同国の開発に向けた推進役を担っている。

このような、氏の東ティモール独立に至る指導力、その後の平和構築や国家建設への貢献は高く評価され、1999年に欧州議会から「サハロフ賞」、2000年にシドニー平和財団から「シドニー平和賞」、2002年には欧州評議会から「南北賞」など、平和・人権に対する数々の名誉ある賞を受賞している。

日本は、東ティモールの独立以前から、同国の人権尊重や民族自決の支援を行っており、独立前後からは国連の信託基金への多額の拠出や人的支援を行うなど、同国との関係を深めてきた。氏の政権の下でも、JICAやNGOの各種プロジェクトを通じて、同国のインフラや人材育成支援が行われ、道路、橋の補修・維持などのインフラ支援活動や各種民生支援活動は現在も続いている。

早稲田大学は、東ティモールと日本の関係を重視する氏の支援のもとで、2009年より紛争後の復興の現状や課題等について、社会調査に基づく現場実習を現地で展開し、国連撤退後の同国の政治社会状況調査をはじめ、現地政府機関、NGO、教育機関と連携しながら積極的に教育研究活動を展開している。また現在は、JICA長期研修員受入事業や文部科学省国費優先配置プログラムを通じて、同国の大学院生4名が本学にて研究活動に携わっており、将来の両国間の架け橋となる中核人材として期待されている。さらに、本学社会科学総合学院は東ティモール国立大学社会科学部と箇所間協定を締結し、紛争解決論実習の科目を設置し、本学から教員・学生を継続的に現地に派遣することで、着実に交流の実績を築きつつある。

東ティモールを独立に導いた氏の不屈の精神、国民間の和解をもたらした卓抜したリーダーシップ、常に国民のために行動する奉仕の姿勢は、まさしく早稲田大学が教育目標とする理想の人物像を具現するものであり、氏に名誉博士の学位を贈呈することは、本学の全学生、東ティモールの将来を担う留学生に対し、目指すべきリーダーの姿を指し示す重要な機会となると確信する。

ここに早稲田大学は、カイ・ララ・シャナナ・グスマン氏に
名誉博士（Honorary Doctor of Laws）の学位を贈ることとした。

学問の府に栄えあれ！

大学が栄誉を与えんとする者を讃えよ！

(Vivat universitas scientiarum! Laudate quem universitas honorabit!)

2016年10月6日

早稲田大学